

機関番号：34511
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20530788
 研究課題名（和文） 近代都市における中等教育機会の基礎的研究—個票データを用いた実業層の再生産戦略—
 研究課題名（英文） Fundamental study in modern city at secondary education chance—Reproduction strategy of business layer where individual data was used—
 研究代表者
 中村 隆文（NAKAMURA TAKAFUMI）
 神戸女子大学・文学部・教授
 研究者番号：20288260

研究成果の概要（和文）：神戸一中の個票データベースの完成により、先行研究である鶴岡中学の共同研究との地域間比較が可能となった。地方都市（鶴岡中）と比較することにより、近代都市（神戸一中）としての中等教育機関の社会的機能が明らかになった。神戸一中の個票データを分析することにより、近代都市における神戸一中の利用層は士族ではなく、平民が学校を積極的に戦略的に利用していたことを証明することができたのである。さらに我々は戦前における旧来型の中学校モデルと近代的中学校モデルの併存、衝突、近代型に収斂するプロセスを明らかにし、教育の担い手としての近代実業層の存在と学校利用戦略を実証した。

研究成果の概要（英文）：The comparison between regions with a joint research of the Tsuruoka junior high school that was the previous work became possible by completing piece vote data base of the Kobe junior high school. The social function of the secondary educational institute as the modern city became clear by comparing it with the suburban city. The class of use of one Kobe inside in the modern city was able to prove that a commoner used a school strategically positively not family with samurai antecedents by analyzing unit vote data in Kobe one. Furthermore, we clarified a process to converge in a type in the coexistence of the junior high school model of the handed-down convention type before the war and the modern junior high school model, a collision, modern times and demonstrated existence and a school use strategy of the class of business in the modern times as the leading figure of the education.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 1,400,000 | 420,000 | 1,820,000 |
| 2009年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2010年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,500,000 | 750,000 | 3,250,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：教育社会学

1. 研究開始当初の背景

商工業層はこれまで学校利用には消極的な「遅れた旧中間層」と見なされてきたが、

他方、都市の産業化の積極的な担い手でもあった。本研究では後者を重視する立場から、銀行会社員や近代部門の自営層も含む「実業

層」というカテゴリに焦点を絞り、彼らの学校利用と再生産戦略が実際にはどのように結びついていたのか、その構造的な解明を目的とする。この課題に対して、①実業層の再生産戦略の中で学校利用に期待される機能がどのように変容してきたのか（教育社会的観点）、また逆に、②学校利用による再生産戦略が都市の産業化や経営の近代化にどのような影響をもたらしたのか（社会経済史的観点）、という2方向からアプローチする。社会移動を観察するのに最も妥当な中等教育機会、とりわけ地元の進学名門校を分析の中心に据え、学籍簿等の個票データを利用した神戸一中と鶴岡中学の比較によりモデルを構築し、金沢と和歌山の事例研究により検証・補完する。対象時期は、都市の産業化と経営の近代化と教育機会の拡大が同時進行した、明治後期から昭和初期(1905~34)の30年間とした。

中等教育機会の実証的分析により近代化過程における社会移動および階層形成のモデルを構築する研究は、これまで兵庫県丹波篠山（天野郁夫編『学歴主義の社会史』1991年）や山形県鶴岡（広田照幸編『近代化過程における中等教育の機能変容に関する地域間比較』2001年）を主なフィールドとして、着実に蓄積・継承されてきた。その実証研究の過程で、学籍簿等の個票データを利用した手法や職業移動を分析する枠組などが確立されたが、他方、構築されるモデルは小規模な地方都市という地域特性の制約を受けざるをえなかった。例えば商工業層は遅れて教育意識に目覚め、学校利用の目的は「新中間層」への上昇移動にあったというイメージである。本研究は先行研究の手法と枠組を継承しつつ、フィールドを近代実業都市・神戸に置くことで「実業層の厚み」を活かした分析を目指す。経済変動の少ない地方都市とは異なり、神戸のような先端的な近代都市では、実業層の環境適応の方法は相当バリエーションに富んでいる。

この着想のきっかけは、兵庫県立神戸第一中学校（神戸一中）卒業者の個票データベース(1905~19)と同窓会名簿を利用した職業移動パターン分析である。すなわち、神戸一中への進学者には（鶴岡中学とは異なり）会社員と商工業を合わせた実業層が多く含まれるので、まず①経済史の指標を用いて商業を近代商／在来商に分類することが可能になり、②近代商／在来商／鉱工業の間で学校利用の仕方が異なること、および③実業層内部で再生産される傾向が強いことが明らかになった（井上義和「旧制中学校進学機会における長男優先度の分析」『ソシオロジ』157号、2006年）。これらの知見は、対象時期(1905~34)が重なる鶴岡との地域間比較により、より明確になった。

2. 研究の目的

兵庫県立神戸第一中学校の個票データベースを分析し、「実業層」の学校利用と再生産戦略が実際にはどのように結びついていたのか、その構造的な解明をする。「新／旧中間層」という社会的分類を横断するかたちで「非実業／実業セクター」という経済史的な分類を設定する。職業移動パターンに着目すると、新中間層への不可逆的な移動によって近代化過程の階層形成を説明するのが「鶴岡モデル」だとすれば、本研究が想定する「神戸モデル」は中等教育機会を通じた実業セクター内部での人材還流によって都市の産業化と経営の近代化を説明することを目指す。両者は対立的ではなく補完的な関係にある。近代化過程における教育機会と社会階層の関係について、鶴岡モデルは「新中間層」の拡大過程を中心に記述したが、神戸モデルは「実業層」の多様な学校利用の収束過程を記述する。

従来の社会移動研究において支配的なモデルはいわば「城下町モデル」であり、地方都市の中学を経ての進学などについては説明力があるが、ここでは「神戸モデル」を提示する必要があった。

つまり、神戸モデルは新制度によって、前身がないところに生まれたものである。神戸は天領であり、藩という政治的な中心がなかった。当然藩校もない。さらに、近代以前には、大阪の適塾にあたるような有力な私塾も、寺社が運営する教育機関も主だったものはなかった。つまり神戸では、近代的学校制度の成立によって初めてできた学校であるということ、「近代学校モデル」ということができる。

城下町モデル／神戸モデルの違いは、旧制度の推進力によって進学者を輩出する地域と、新制度の推進力によって進学者を輩出する地域の違いと考えることもできそう。城下町である金沢などでは東京の旧藩邸に住まわせたり、そのほか藩主家の奨学金によって進学させるケースも多かったため、身分に結び付いた学校や進学行動があつて当然だと考えられる。他方藩校のない都市を見ると、京都では町組小学校の設立に寄与したのが町衆であることなど、商業層の推進力によって進学者を輩出する特徴があるのではないだろうか。士族層ではなく平民層が、また政治的権力に近い職業ではなく商業層が積極的に進学するのが、旧制度の推進力のない神戸の特徴である。城下町モデルは藩校モデル、神戸モデルは非藩校モデルと考えることもできる。城下町モデルには、東京、和歌山、金沢、鶴岡、篠山。神戸モデルには東京、京都、横浜、長崎、小樽、大阪があてはまると考える。この2つのモデルによって、日本の

近代教育が形成されていったと考えてみる。

この2つのモデルから考えられることは、「城下町モデル」は前近代に由来する教育制度が近代的な制度に移行した形であり、藩校が母体となった中学に、士族が中心に通う。よって当初は町人にとっては敷居が高く、士族→公務自由業（官公吏、教員）の占有率が高い。商工業、農業層の比率が低いのは当然である。よって、ここで神戸モデルのキーとなるのが、商業層である。

3. 研究の方法

(1) 神戸一中の個票データベース(1905～34)の完成、基本データ集の作成。兵庫県立神戸高等学校所蔵の学籍簿や同窓会資料の閲覧を許可され、神戸第一中学校(神戸一)の学籍簿や参考簿等の個票データベースを作成、データベースが完成した時点で、鶴岡と同一の方法でデータ処理を施し、基本データ集(クロス集計表)を作成した。

(2) 関連分野の調査と神戸第一中学校データを位置づけた。鶴岡中学の研究結果を参照しながら、実業層の学校利用と職業移動の地域間比較をおこない、鶴岡モデルと神戸モデルを構築した。

(3) 近代日本における進学パターンと再生産構造のモデル構築。モデル化には明治後期～昭和初期の実業層の学校利用と職業移動の変容パターンを分析した。

4. 研究成果

個人情報保護を背景に学籍簿や同窓会名簿等の利用が困難になりつつあるので、旧制中学校の個票データの希少性はますます高まることが予想される。本研究で整備した神戸一中データベースは教育機会と社会移動の歴史研究にとって貴重な財産となるであろう。神戸一中の個票データベースの完成により、先行研究である鶴岡中学の共同研究との地域間比較が可能となった。データベースの分析を通して以下のことが明らかになった。

(1) 士族の占有率から城下町モデルと神戸モデルを特徴づけることができた。士族の占有率が高ければ近世的都市モデルと位置づけられる。(例えば鶴岡で士族の占有率36%、神戸一中では20%以下)

(2) 各分析との関連で見ると、兄弟順位についてはホワイトカラー、官公吏は(城下町以上に)長男優先で進学しており、商業層ではきょうだい順位関係がない。近代化=平準化とはならないところが興味深い。商業層に学校文化とのかい離がなかった。つまり、これは近代都市の中学校の特徴であるといえる。

(3) 官公吏、専門自由業は神戸から流出するが、鉱工業、商業層は在留、公吏、専門

自由業の流出は鶴岡と同じ傾向であった。

このように地方都市(鶴岡中)と比較することにより、近代都市(神戸一中)としての中等教育機関の社会的機能が明らかとなった。

先行する鶴岡中学の研究蓄積を参照することで、厳密な地域間比較が可能となった。神戸モデルの構築だけでなく、鶴岡モデルもより大きな枠組の中で再評価される。それにより教育社会学の歴史研究の再活性化に貢献するであろう。地域間比較によるモデル構築は、都市の規模や伝統や近代化のパターンなどから実業層の性格の差異を示唆した。神戸一中の個票データを分析することにより、近代都市における神戸一中の利用層は士族ではなく、平民が学校を積極的に戦略的に利用していたことを証明することができたのである。さらに我々は戦前における旧来型の中学校モデルと近代的中学校モデルの併存、衝突、近代型に収斂するプロセスを明らかにし、教育の担い手としての近代実業層の存在と学校利用戦略を実証したのであった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計2件)

- ①保田その・加藤善子「旧制中学生徒の出身家庭と学業達成および進路ー神戸一中学籍データの分析よりー」、日本教育社会学会、2010年9月18日。関西大学。
- ②橘佳江・保田その・加藤善子・井上好人「学籍データベース作成の方法と課題ー旧制神戸一中を事例としてー」、日本教育社会学会、2008年9月20日。上越教育大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 隆文 (NAKAMURA TAKAFUMI)
神戸女子大学・文学部・教授
研究者番号：20288260

(2) 研究分担者

今井 修平 (IMAI SHUHEI)
神戸女子大学・文学部・教授
研究者番号：00131540

(3) 連携研究者

菊池 城司 (KIKUCHI JOUJI)
吉備国際大学・社会学部・教授
研究者番号：00027963
井上 義和 (INOUE YOSHIKAZU)
関西国際大学・人間科学部・准教授
研究者番号：10324592
井上 好人 (INOUE YOSHITO)
金沢星稜大学 人間科学部・准教授

研究者番号：30319032

加藤 善子 (KATOU YOSHIKO)

信州大学・全学教育機構・講師

研究者番号：90434969

富岡 勝 (TOMIOKA MASARU)

近畿大学・教職教育部・准教授

研究者番号：50303798

末富 芳 (SUETOMI KAORI)

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：40363296